

Marco PELLEGRINI, From «earlier crusades» to «later crusades». Holy war plans in Italy and Europe between Middle Ages and Renaissance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ISHIGURO, Morihisa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00066975

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「初期十字軍」から「後期十字軍」へ

中世からルネサンス期に至るイタリア及びヨーロッパにおける聖戦計画

マルコ・ペレグリーニ（石黒 盛久訳）

解題

「初期十字軍」から「後期十字軍」へ：中世からルネサンス期に至るイタリア及びヨーロッパにおける聖戦計画」と銘打ち以下に邦訳した論考は、イタリア・ベルガモ大学のマルコ・ペレグリーニ教授が、アルプス史研究会の支援により一昨年の11月17日甲南大学にて行われた研究集会で行った講演である。最近作の『サヴォナローラ伝』(*Savonarola. Profizie e martirio nell'età delle guerre d'Italia*, Salerno, 2020)や『初期ルネサンスの宗教と人文主義』(*Religione e umanesimo nel primo Rinascimento. Da Petrarca a Alberti*, Le Lettere, 2012)といった、宗教文化史を含む幅広い著作を通じ、現代イタリアを代表するルネサンス史家の地位を確立したペレグリーニ教授の専門は、15世紀イタリアにおける〈十字軍〉理念の存続を切口とする宗教と政治の相関史である。『十字軍後の十字軍』(*Le crociate dopo le crociate*, Il Mulino, 2013)、『対トルコ聖戦—カール5世による未完の十字軍』(*Guerra santa contro i turchi. La crociata impossibile di Carlo V*, Il Mulino, 2015)、『ルネサンス期における十字軍』(*La crociata nel Rinascimento. Mutazione di un mito 1400-1600*, Le Lettere, 2015)等、ペレグリーニ教授の主要著作は、専らこの主題を核とするものであるが、今回訳出した講演草稿は、これに先立ち早稲田大学にて行われた同教授の講演の記者による邦訳（「中世からルネサンス期に至る教皇権と聖戦」『世界史研究論叢』第10号所載）と併せ、教授のこうした業績への手引きとして、日本の研究界にも有益なものと信じる。

ペレグリーニ教授も言及するように、教科書的観点から言えば十字軍とは専ら、中世中期に聖地エルサレムを争奪の場として繰り広げられた一連の戦争として語られることが大半である。だが実際には十字軍の覆う時空はそれより遥かに広大なものだ。中世全般に亘りスペインで進行した国土回復運動（レコンキスタ）も、13世紀前半異端カタリ派に対し南仏において発動されたアルビジョワ十字軍も、同時期北方においてドイツ騎士団によって繰り広げられたいわゆる北方十字軍もまた十字軍として語られ得る。加えて今回の講演でペレグリーニ教授が強調するのは、14世紀後半から17世紀全般にかけ、バルカン半島と地中海海域で展開された世界大戦としての対トルコ戦争が、聖地を焦点に展開された「真の十字軍」により制度化された枠組みのもと実行された、最大規模の十字軍であるという点に他ならない。1396年のニコポリスの戦い、1571年のレ

パントの海戦さらには1683年の第二回ウィーン包囲に至る、近世ヨーロッパ史を彩る大戦争が、ことごとく十字軍の制度的枠組みにおいて語られ得るものであったことは確かである。

このように十字軍は近世にまで多大な影響を残す現象である傍ら、制度化したことにより反ってそれが、宗教的権威から次第に自立していく近世君主制国家の、政治的玩具に転化してしまったこともまた見逃せない。カール5世やフェルディナンド1世に代表されるハプスブルク帝国も、シャルル8世やフランソワ1世をいただくフランス王政府もそれぞれ、表向きの旗印としては十字軍理念を掲げつつ、水面下ではコンスタンティノープルのスルタンと実利主義的な外交を遂行していたのだ。“にもかかわらず”〈十字軍〉が理念として、形成途上の初期近世国家にとり看過し得ない政治的機能を果たしていたこと―そのことの意味を把握することの重要性を、ペレグリーニ教授は強調する。そしてこうした〈十字軍〉理念をめぐる表裏の使い分けのひな型が、ブルゴーニュのフィリップ豪胆公やサヴォアのアメデーオ6世そしてミラノ公ジャンガレアッツォ・ヴィスコンティ等による対オスマン外交の戦略という事例に存することが指摘されるのである。

これらの君主たちは〈十字軍〉の旗印を高々と掲げ教皇権の普遍的権威と提携すること媒介に、西欧諸国間の理念的リーダーシップをとることにより、皇帝やフランス王の如き上位者からの相対的自立を希求した。だが彼らはそれと同時に、自身の競争者を蹴落とす実益のためには、異教徒の覇者との取引に興じる国家理性の行使にいささかの呵責も感じてはいなかった。こうしたペレグリーニ教授の指摘を読んだとき、訳者が想起したのは金羊毛騎士団を創設し十字軍に出征することを何度も厳粛に誓いながら、その度に故障を言い立て約束を反故にし続けたブルゴーニュのフィリップ善良公につき、それでも彼が十字軍理念を真剣に信奉していたのだと評した、『中世の秋』におけるホイジンガの言葉であった。人間中心主義に基づく宗教の影響力からの脱却という通俗的ルネサンス観とは逆に、超越的なものへの限りない憧憬と、地上の利害への冷徹な打算が矛盾なく共存し得た点に、ルネサンス期の政治的選良の、ひいてはルネサンス期知識人全般の心性を解き明かす鍵があるのではないか。そしてこの現代人から見れば矛盾としか見えないものの共存へのペレグリーニ教授の関心が、彼の研究をルネサンス期十字軍理念の考究から、そのもう一つの柱である宗教と人文主義の内的連関の吟味へと押し広げていく契機となったことを、改めて得心させられた。

翻訳本文

長きにわたる論戦の後、今日学者たちからなる学術的共同体においては、十字軍の歴史が、ほんの20年前までそう思われていたよりはるかに長い期間にわたって展開していたことについて、大方の合意が形成されつつある。とはいえヨーロッパの伝統的歴史記述は今日も相変わらず「十字軍」という言葉を、中世世界と結びつけて論じがちである。その結果十字軍運動の歴史はもっぱら中世史家に独占され続けている観がある。「十字軍」について語る場合ヨーロッパの中世史家たちは専ら、聖地のイスラム教占領者からの奪還という全般的計画の一部としての、11

世紀から13世紀に及ぶ派兵活動のことを指している。このような類の派兵は正しく言えば「聖地十字軍」と称すべきであろう。だがそれはこれから我々が検討するように、数多くの十字軍の一例であるに過ぎないのである。「聖地十字軍」とは何か？教科書的記述によればそれは、1095年に最初に出現した、カトリック教会の一制度のことである。この年、教皇ウルバヌス2世はクレルモン公会議において、エルサレムに向けて出立しその地を支配するイスラム教支配者の「専制」から聖地を解放するべく、選りすぐりの戦士の一団を招聘したのであった。イスラム支配者たちがなぜ「専制」を振るう罪人であると断定されたかといえば、キリスト教徒巡礼に対する彼らの抑圧的態度の故であった。この軍事的介入の公式の目的とは、パレスチナにおけるキリスト教徒のための安全の回復に他ならなかった。正にこの地こそはキリスト教世界の精神的並びに政治的一部分とみなされていたにもかかわらず、イスラム国家すなわちエジプトにより征服されていた土地であった。

このような場合に教皇権は、西方世界の至高の統領として立ち上がった。理論的に言えば十字軍は、キリスト教世界の利益を前提に着想された派兵活動であり、その実施を宣言し得るのは教皇だけであった。それは使徒座の保護下に置かれた義勇兵からなる国際的軍事力により構成され、種々の特権をも享受した。例えば彼らは借金取りの督促を免れたのだ。十字軍の軍勢は免罪符の販売を含む種々の経済的支援手段を通じて、カトリック教会により監督されていた。作戦の指揮権は通常教皇により世俗の君主に委託されたが、その場合必ず教皇の代理人（即ち「教皇使節」のことである）の補佐を受けることとなっていた。

1099年のエルサレム占領という華々しい始まりの後、聖地十字軍の歴史は一連の敗北の歴史と化してしまった。その頂点こそが1180年のエルサレム陥落に他ならない。それから一世紀ばかり後、1291年にはアクレ（今日のイスラエルのアッコン）の聖ヨハネ要塞がエジプト軍により奪取されたが、この要塞こそがイスラム教徒である敵対者の手中に落ちた、東方におけるキリスト教徒の最後の拠点であった。慣習的年代学の基準によれば聖地十字軍は、クレルモン公会議における最初の宣言に伴う1095年に始まり、1291年のアクレの聖ヨハネ要塞の陥落までの間に、8回を数えている。これらに加えて人は、教皇により権威づけられず東方へのほんのしばらくの行軍の後瓦解してしまった、「民衆十字軍」と言われる一連の自発的軍事行動についても、これを十字軍と見なすことができよう。だが「民衆十字軍」は派兵活動という以上に、社会の全面的刷新への預言者の期待により触発された狂信に発する逸話であった。こうした預言者的期待は、人類の浄化のための手段としての聖戦という理念と相関するものであった。

ヨーロッパから聖地へと向けた八回に及ぶ公式の派兵活動の後に十字軍の歴史は、中世史家がそれを取り扱うのが難しい暗黒時代を迎えることとなる。たとえばニコポリスの戦いのような、主要な軍事的事件に直面した場合がそうである。一万人もも及ぶ戦死者出したこの戦いは実際の処、十字軍の歴史の全期間を通して最も血なまぐさい大惨事に他ならなかった。にもかかわらずこうした出来事に直面しても中世史家たちは、中近東という地理的情景の外部で生じたとともに、中世という時代的境界の外側でも生じたこの出来事の重要性を見落としてしまっている。ニ

ニコポリスの戦いは1396年に生じているが、この日付はヨーロッパ史における時系列で言えば、中世を近世から切り分ける端境期に位置していた。このことはこの時代が学術的教説の分野の観点から見て、無主の地であることを意味していた。他方地理的観点から見ればこの戦いは今日のブルガリアに属する地で行われたのであり、それゆえそれは「聖地十字軍」の範疇にほとんど適合しないものであった。結局の処ニコポリスの戦いは中世以後の十字軍に属しており、パレスチナとはほとんど無関係であった。これらの理由から見てこの出来事は、中世史家の研究領域から、遥かかけ離れたものであるように見える。

もし中世史家がそうしがちなように、我々が「聖地十字軍」を唯一考え得る十字軍の形式だと考えるとしたら、我々は十字軍運動を7世紀に生じたイスラム教徒による中近東の占領に対する反撃だと見なす他はなくなる。ここで強調しなくてはならないのは、たとえ十字軍をこのように解釈するとしても、十字軍を宗教戦争と理解する訳には行かないということである。その目的はイスラム教徒をキリストの福音に改宗させることではなかった。その目的とする処はむしろ、キリスト教巡礼者の犠牲として噴出したイスラム教側の狂信により生じたトラブルに苛まれるパレスチナという地域に、平和と秩序を再建することに存した。

今日のテロリズムの修辭において十字軍は専ら、イスラム教の矜持に対する暴力的侵害とヨーロッパ植民地主義の予行演習としてのみ描き出されている。こうした誤った解釈が生じかねない原因がないわけではない。1098年から1099年にかけて繰り広げられた一回目の十字軍戦役の結果は、中近東の植民地主義的分割に似たものであったかのように見える。キリスト教巡礼者に恒常的安全を確保するという仕事自体が、十字軍に対してエルサレムとその周辺地域をその支配下に置くという可能性を提供したのである。第一回十字軍の帰結として、新しい小国家が東地中海沿岸に糸状に設立された。それらは十字軍国家と呼ばれるもので、ヨーロッパ本土の封建制君主国家の模倣物であった。

教皇により自由のための戦争と宣言されたにもかかわらず、十字軍はある種の植民地ビジネスへと墮してしまった。その利益はいくつかのイタリアの商事会社の財政と同様、ヨーロッパの諸王侯家のエリートの資産拡大に役立った。しかしながらこうした事業の繁栄は短期間に終わってしまった。ヨーロッパの世論に疑いなく明らかとなったように、聖地における十字軍という経験はそれを誇るに足るものでは、ほとんどなくなってしまったのである。エルサレムのキリスト教王国は、長きにわたり存続することができなかった。それは百年とは持たなかったのである。そしてこの地域におけるいくつかの主要な拠点の陥落が、エルサレムの失陥に先行していた。1099年に始まり1291年に終わる十字軍による聖地の占領は200年にも及んだ訳だが、それは取り返しのつかない敗北を以て終了した。つまり十字軍戦士たちは十字軍に勝利を収めることができなかったのである。この戦争の真実の勝利者はエジプトの мамルーク朝スルタン国家だった。この国家は十字軍という政治状況を活用して、軍事的なスーパーパワーの地位を確立し、イスラム世界の旗手としてのその姿を輝かせた。13世紀の後半にエジプトのスルタンたちは、東方地域におけるヨーロッパによる支配の残滓を一掃したばかりか、メソポタミアを席捲しバグダッドのカ

リフ国家を壊滅させたモンゴルの大軍勢を二度にわたって押し返したのである。それがメソポタミアからシリアへと向かう進路の途上に立ちはだかることによって、エジプトはモンゴル勢力が地中海沿岸へと進出することを阻んだのであった。

このことは世界史における主要な出来事であり、かつまた十字軍の経験を語るにつき考慮に入れておかなければならない事象であった。ヨーロッパの観点からすれば聖地十字軍は、取り返しのつかない失敗を運命づけられた儂い企画であるに過ぎなかったかも知れない。だがエジプト側の視点から見れば十字軍は、それにより自身の黄金時代が幕を開けることとなる、西方からもたらされた恵み深い機会として働いた。ヨーロッパによるエルサレム占領への対応の必要が、エジプトの政治体制の変革をもたらした。そしてまさにこのことこそがカイロのスルタン国家を、世界的勢力へと躍進させる出発点となった。今日、中世エジプトの躍進はサラディンの形姿によって象徴されている。彼は全イスラム世界において今日もなお英雄として崇拝されている。サラディンはエルサレムのイスラム共同体への回復を確かなものにした人物であるが、それは単にこの都市を武力で征服することによってのみならず、この年にイスラム教の聖地の地位を付与することによってもそうだったのだ。実を言えばエルサレムはこれ以前、それが今日なお保持し続けているようなイスラム教の聖地としての地位を有していた訳ではなかった。実に逆説的なことであるがキリスト教側による十字軍こそが、エルサレムのイスラム教世界の首都への変貌の契機となったのである。

この一連の出来事の時系列は中世史の圏内に収まっている。それゆえ十字軍は中世史の基本的側面の一つであり、それは専ら中世史家により取り扱われるべきだとする暗黙の了解が、従来から学術的歴史家の間に広まっていた。もちろんこうした年代規定は、軽視し得ないいくつかの軍事的な事件を等閑に付している。十字軍が中世の終わりと共に終了しなかったことを、実は誰もが知っている。中世が終わっても少なくとも200年間にはキリスト教徒とイスラム教徒の衝突は続いていたのだ。もっと言おう。十字軍の歴史研究が中世史同様に近世史にも影響を与える手法であることを論じることは、全く以て妥当なことと言えるのだ。しかしなぜ、十字軍のかくも長きにわたる歴史を受け入れることが困難なのだろうか。如何なる十字軍が中世以後の十字軍なのであろうか。そしてまた一体いつ十字軍という歴史的経験は終了したのであろうか。こうした疑問に対する答えは、ごく数十年前まで見出されることはなかった。正に数十年前によく、教皇権がその最後の聖戦の宣言を行ったのが1718年であることが確認されたのだ。十字軍が思った以上に長期にわたる事象であるということは、近年やっと学术界に認知された事柄なのである。長らくある種の偏見が歴史家をして中世の十字軍こそが、中世以後の十字軍と区別されるべき「真の」十字軍であると考えさせてきた。そうした見方からすれば中世以後の十字軍など、「偽りの」十字軍に過ぎないのである。

もちろんこうした厳格な判断基準は、中世史家の間に好評を以て迎え入れられた。その中の幾人かは更に進んで、それが如何なる軍事的効果をも生まなかった以上、中世以後の十字軍など考慮にも値しないと断言した。例えば1396年のニコポリスの戦いは、如何なる政治的効果も持た

ぬ大虐殺に過ぎなかった。かくしてこうした出来事は、単なる歴史的余滴と見なされてしまった。そうでなくともこの時期のいかなる派兵活動も、ヨーロッパによる支配権を聖地に再度及ぼすことがなかったから、過ぎ去った時代の残響と見過ごされるに留まった。しかしもしこうした基準が受け入れられるとするならば我々は、それが成功裏に終わった 1098 年から 99 年の第一回の十字軍だけに、十字軍の歴史を限定せざるを得なくなってしまう。「真の」十字軍と「偽り」の十字軍の区別は単に歴史的な誤認に過ぎまい。だが恐らくそれは十字軍そのものを解明するのに有益なものともなる。もし我々がこうした伝統的展望を受け入れるならば、我々は「十字軍」なる言葉を専ら、聖地を異教徒の支配から取り戻すことを目的とする軍事活動だけに適用すべきだということになる。周知のようにこれこそ聖地十字軍という十字軍の形態なのである。これこそが中世史家の言う処の「真の」十字軍である。だがこれだけが十字軍の唯一可能な形態なのだろうか。

その答えは否だ。中世以後にも様々な種類の十字軍が存在していた。1215 年に亡くなった教皇イノケンティウス 3 世は、歴史家により「教皇神権政治」の頂点をなす人物と目された人物である。それは宇宙の主たるキリストの「代理人」という資格を以てなされる、教皇による世界支配の主張に他ならない。また彼の治世は、キリスト教的聖戦をカトリック教会による管理統制の下に置かんとする教皇の努力の故に、十字軍運動史の転換点をなしていた。イノケンティウス 3 世の治世を通じてローマ・カトリック教会は、その三つの敵対者に応じ三つの異なる類の十字軍を利用するに至った。第一の種類は中世史家の観点からする「古典的」な類の十字軍である。それは聖地を支配する異教徒に対し発動される軍事行動に他ならない。そして既に我々が確認したようにかかる異教徒は、キリスト教徒の犠牲に基づく傲慢な振舞いという意味での「専制」の科を以て、責められるべき存在であった。第二の種類は十字軍とは即ち、異教徒より質の悪い存在とされて、また事実そのように取り扱われていた異端者に対するそれであった。第三の十字軍とはいわゆる「北方十字軍」である。それは北ヨーロッパの非キリスト教王国に対する戦いであった。こうした諸王国は、福音宣教に対し積極的反抗を示すことにより、科あるものとされたのである。

だが第四の十字軍が、イノケンティウス 3 世の没後しばらく後に形成され始めた。教会に対する不遜な振舞いは東方地域のイスラム教君主のみか、ヨーロッパ内のキリスト教君主にもありがちな事だった故に、教皇権は「僭主」として振舞うキリスト教君主に対しても聖戦を宣告し始めたのだ。これこそ所謂「政治的十字軍」である。それは主に、ローマ・カトリック教会のイタリア政策への反抗者たちに向け発せられた。この種の十字軍の最も著名な犠牲者こそホーエンシュタウフェン皇帝家である。そのイタリアに対する主権は、この「政治的十字軍」という手段により無効化されてしまった。だが「政治的十字軍」は同様に、中部イタリアの群小君主国の如き卑小な対象に対しても発動された。このような「政治的十字軍」の発動対象となることによりこれら諸国は、教皇権の領土的野心への反抗を償わされたのだ。「専制」に対する自由の戦いとして始まった「政治的十字軍」は、かくしてイタリアの諸地域をローマ・カトリック教会の権威の

下に置くための戦いへと頹落した。イタリアにおける独立国家の主としての教皇権の興隆の如き、特殊個別の目的のためにキリスト教的聖戦理念を活用することは、教皇が考慮に入れるべき論争の余地ある選択の一つを示すものであった。正にこのことこそが、14世紀の半ばに好戦的なスペイン人枢機卿ジル・アルボノスにより推進された大規模な軍事作戦が、十字軍ではなく単なる私戦いだと目された所以である。

後期中世の教皇たちが中部イタリアの直接支配を目当てに教会国家確立の政策に乗り出した時、彼らは賢明にも聖戦を宣言することを自制した。その代わりに彼らは領域主権者としての彼らの立場を強化すべく、彼ら自身の財政的資源に依存して事を進めた。そのイタリアにおける支配領域の拡張のため、教皇たちにより私的に資金を供給され14世紀半ばに開始された彼らの征服戦争は、教会国家の拡張に対しスペイン国王が拒否権を発動する16世紀半ばに至るまで、不断に展開されていくに至った。全般的に言ってこれらの戦争は、ローマ・カトリック教会に一定の支配領域を付与することにより成功を収めた。こうした教会国家の領域は、教会の独立の侵犯に対する安全ベルトだと考えられるに至っていた。しかしながらこうした戦争は十字軍とは言えなかったし、従って我々はこれらの戦争をここで取り上げるつもりはない。「政治的十字軍」が教会国家建設のための戦争へと転換された14世紀の中盤、異教徒を対象とした「古典的十字軍」は従来とは異なった姿をとるようになった。異教徒に対する派兵行動の発動は、それが対象とする地域の名前を以て呼称されるようになった。その名が次第次第に仮想的なものとなっていた「聖地十字軍」と並んで教皇権は、北アフリカを対象とする海上派兵を開始したが、これはまさにそのこと故に「バルバリア十字軍」と呼ばれている（バルバリアはエジプトとモロッコの間広がる沿岸地域の名称である）。

その後ギリシアとバルカン半島の間で、数限りない軍事介入が繰り返される。この地域が通常ロマニアと称された事から、この地域に対する軍事介入はロマニア十字軍と呼ばれている。その東部境界地帯に広がるのがブルガリアだ。中世その名を関した独立国家が存在したこの地域は、14世紀の半ばに入るとトルコによる攻撃にさらされる始めた。この地域に西方から軍事的支援を提供しようとの試みは、「ブルガリア十字軍」として知られる派兵の宣言へとつながる。1396年のニコポリスの戦いは、キリスト教世界における空前の軍事力の集結に至った「ブルガリア十字軍」の悲劇的結末を告げる出来事であった。

キリスト教的聖戦の伝統的観念に追加されたこの地理的言及の多様性の背後には、一体如何なる歴史的変革が隠されているのだろうか。その答えはこれを、主に中近東に狙いを定めた初期十字軍からより広い戦野において繰り返された戦争たる所謂「後期十字軍」への変遷の内に、これを見出すことができよう。それはあたかも今日言う処の、世界大戦に類似した戦争であった。通説とは異なり、後期十字軍の歴史は初期十字軍の歴史に負けず劣らず重要なものである。実際それが関与した政治的並びに軍事的勢力のスケールに着目するなら、後期十字軍が有するかかる重要性は、一層顕著なものであることがわかるだろう。初期十字軍と後期十字軍の実質的な差異は、その目的とする相手と聖戦が展開される場所の違いに基づいている。周知の通り13世紀最

後の数十年間は、聖地に対するヨーロッパ側の支配の最終的喪失により特徴づけられる。驚くべき符合ではあるが、正にこの時期はビザンツ帝国辺境地域における新たな軍事的勢力の勃興が生じた時期に他ならない。この勢力こそオスマン・トルコ君侯国であった。

世界史のこの新しい主体の次第次第の発展は、続く四世紀に亘るキリスト教ヨーロッパに対する挑戦を示すものであった。換言すれば「後期十字軍」とは、オスマン帝国の興隆という多領域多民族を含む帝国を形成する阻止し難い潮流に対する、キリスト教世界からの反作用だったのだと見なすことができるだろう。軍事的征服と並行して、それ以前キリスト教勢力の領域だった地域のイスラム教信仰への改宗の新たな波が生じてきた。もっともなことに幾人かの歴史家たちは、14世紀から18世紀の間にオスマン帝国により推進された「世界の再度のイスラム化」について語っている。それは7世紀から8世紀にかけてカリフたちの下でなされたイスラム化の努力の理念的再興であった。キリスト教ヨーロッパがその領域において突如直面した、こうしたオスマン帝国に由来する挑戦をざっと確認しておくこととしよう。14世紀半ばオスマン君侯国はスルタンの称号を獲得した。それから一世紀の後の1453年にオスマンのスルタンはビザンツの帝都を征服し、最後のローマ皇帝の後継者の地位を確保した。1516年から1517年の間にオスマンのスルタンはエジプトを占領し、イスラム教諸国家共同体におけるもっとも傑出した支配者たる地位を確立した。続いて彼はアラビア半島のイスラム教の諸聖地の管理権を入手し、世界支配の野心を抱懐するに至ったのである。

当初単に凶暴な遊牧民の一部族としか見られていなかった集団の予期せぬ勃興は、ヨーロッパの諸君主を驚愕させた。彼らは、オスマンの脅威に対抗すべく団結することすらできなかった。それどころか彼らのうちの何人かは、その近隣の王家の苦難から、何らかの利益を引き出そうとすら画策したのである。この論説の最終部分において私はヨーロッパの玄関口で14世紀に生じそれ以後三世紀以上にわたり継続した、東洋と西洋のこの新たなる対立の最初の兆候に焦点を当てようと思う。

こうした対立の第一段階に関心を集中させることを通じ私は、オスマンの脅威がヨーロッパ諸国の間に引き起こした反作用の多様性につき、とりわけイタリアとその分裂した政治的状况に注意をむけつつ、照明を当てたいと考える。中小の規模の諸国家に分裂していたことによりイタリアは、宗教的信条よりも自己の利益を優先させるが如き機会主義的行動の格好の苗床を提供した。しかしながらこれから我々が見ていくように、時にこうした機会主義はなにがしかの理想主義と融合されたのである。このような意味で歴史というものは人間の不誠実かつ矛盾した性格について、常にある教訓を提供してくれるものなのである。

オスマンのスルタンは自身のイタリアでの最初の提携相手を、ジェノヴァ共和国に見出した。オスマンの猛攻に晒されたビザンツ帝国の苦境は、ジェノヴァの商人たちにとり絶好の好機であるかの如く目された。彼らは三日月の旗印（トルコ軍）の勃興に、利益を引き出すべき機会到来を看取したのだ。ジェノヴァの経済的利益は、ビザンツ皇帝がヴェネツィアに保証した商業的特権により大いに損なわれていた。それ故ジェノヴァ人たちは衰弱したビザンツ帝国に対するオス

マンの圧倒的勝利を通じ、ライバルたるヴェネツィア人に対し優位に立つ契機を獲得し得るものと考えたのだ。オスマンの東欧征服の端緒は、イタリアの二つの主要な商業共和国間の敵対関係に発したのである。自身の艦船をスルタンに提供することを通じジェノヴァは、三日月の旗印の西方への進撃を支援した。当時オスマンの軍事力は未だ地上に限定されていた。それはまだ艦隊を持っておらず、専ら歩兵軍団と軽騎兵により構成されていたからである。14世紀の初めにオスマンのスルタンは、ジェノヴァ政府との交渉を何とかやり遂げることに成功した。この成功によりスルタンは一定数のジェノヴァ船を借り出すことに成功した。これらの艦船を活用することにより彼は、その軍勢がダータールネス海峡（ヨーロッパとアジアを分かち自然水路）を突破することに成功したのである。

このようにしてオスマン国家はヨーロッパの地にその最初の領土を獲得するに至った。先に述べたように、この前代未聞の挑戦に対するヨーロッパ勢力の応答は、斜に構えた楽観主義と目先の打算に彩られていた。ローマ教会のみが、長期的視野に立った戦略を展開し得る存在であるかのようにであった。「ローマ教会」と語るとき我々は、13世紀と14世紀の大半の時期に教皇たちが、ローマをその座所としていなかったことに留意しなければならない。ローマの地域的騒擾が教皇たちに首都たるべき都市に留まることを困難とし、彼らにヴィテルボやオルヴィエートといった中部イタリアの他のより小さくだがより安全な都市に、一時的に一時的に転居することを余儀なくさせたのである。にも関わらずローマ教会という名称は教皇とその随員たちにより固守され続けたし、それどころか教皇権がイタリア外に移転した際にも用いられ続けた。ローマとその周辺地域の支配権を喪失した結果教皇クレメンス5世は、フランスの一都市アヴィニオンに移動し、自身をフランス王の後見下に置くという選択を行った。この選択は彼の後継者たちにより継承され、一時的な選択が恒久的なそれへと転換してしまった。もちろんこうしたあいまいな選択はローマ教会を、フランス権力の従属者としてしまう危険性に直面させた。このことこそがなぜこの時期が歴史上、教皇のアヴィニオン「捕囚」の時代と理解されてきたかを説明する。それはバビロニアに強制移住させられたのちユダヤ民族が味わった奴隷状態にまつわる、聖書に起源をもつ誇張された表現であった。

いわゆるアヴィニオン「捕囚」は1309年から1378年に及んだが、それはローマ・カトリック教会の精神的權威の衰退の時代に他ならなかった。その現世における脆弱さにもかかわらず教皇権は、キリスト教世界の精神的身体の頭首としての地位に相応しいものとして行動することを断念した訳ではなかった。アヴィニオンの教皇たちを広範な射程を有する外交的活動の展開へと駆り立てた、普遍主義的世界観に基づく試みの目指す処は、西方キリスト教世界の指導的勢力として彼ら自身を再確立することであった。こうした目標に基づき彼らは、十字軍運動の再興を推進したのだ。アヴィニオンの教皇たちは教会のあらゆる敵対者に対し十字軍を発動した。それらはエジプトのマムルーク朝のスルタンや南部スペインのムーア人たち（グラナダ王国）からリトアニア人、さらにはイタリア内のギベリン党の連中（その中にはミラノのヴィスコンティー門も含まれていた）にまで及ぶ。そして遂に彼らはその照準を、オスマン朝トルコへと定めたのであ

る。

オスマン国家に対する聖戦への教皇の呼びかけに最初に答えたヨーロッパ諸侯こそ、彼の好みの衣装の色合いから緑の伯爵として知られる、サヴォア伯アメデーオ6世であった。十字軍にまつわる彼の冒険こそは、ヨーロッパ諸勢力の側からの応答における統一性の欠如が、如何にしてオスマン人たちの西進を阻む機会を台無しにしてしまったかを示す格好の一例となる。14世紀後半のフランス王国は、イギリスとの間の百年戦争に由来する衰退により麻痺した結果、十字軍運動において如何なる役割を果たすことも断念しなければならなくなっていた。同様にドイツの皇帝も、イタリアを服従させ更には東方で聖戦の主導権を握ることに失敗した結果、無気力状態に陥ってしまっていた。このような理由から教皇権は、彼らに代わる聖戦の指導者を探さざるを得なくなっていた。この新たなる指導者の一人がサヴォア伯であり、間もなくブルゴーニュ公が彼に続いた。この二人の君侯はどちらもフランス王家の競争相手であった。彼らは十字軍運動で傑出した役割を果たしキリスト教世界において最高の名声を獲得することにより、フランスの君主権から脱却しようと試みたのである。教皇ウルバヌス5世の支援を受けたサヴォア伯アメデーオ6世の派兵は、1365年にキプロス王ペーター1世により企画された、エジプトの мамルーク朝とオスマン君侯国の双方を攻撃する計画の一環として構想された。その主要な目標はエジプトの都市アレキサンドリアであった。この都市を奪取し、しかる後にエルサレムの譲渡の代わりにこれをエジプトのスルタンに返還することを企図して、キリスト教徒の軍勢が整えられた。

当初、万事は計画通り進行していくかのように思われた。相当数の軍勢(10000人の歩兵に1400人の騎兵)と共にヴェネツィアを船出したキプロス王ペーター1世は、世の驚きのうちにアレキサンドリアを占領しはしたものの、それを維持することが出来なかった。彼が撤収を余儀なくされたのは他でもなく、彼の指揮下にあった十字軍自身のせいなのである。アレキサンドリアの占領により多大な戦利品を獲た彼らは、これ以上作戦を展開することを躊躇するようになり、エジプト側からの反撃に晒され、せっかく獲得した戦利品をうしなってしまう危険を回避するようになった。1365年10月16日に生じたキリスト教軍勢のアレキサンドリアからの遁走は、全く以て彼らの貪欲と恐怖によるものであった。輝かしい勝利の後キプロス王ペーター1世は、敵により強いられたのではなく彼自身の兵士たちの無秩序や臆病更には利己主義にしいられた、撤収という屈辱に甘んじねばならなくなった。これと対称的にサヴォア伯アメデーオ6世の十字軍は、彼が願使し得た兵力が3000人から4000人を超えなかったことを考慮すれば、大変な成果を上げた。この兵力は彼にガリポリの急襲を断念させる程、寡少という訳でもなかった。ガリポリはダータールネス海峡を制御する要衝に位置する海市で、数年前にトルコの手に戻したばかりであった。1366年、この作戦の成功によってガリポリはキリスト教徒の手中に奪還された。そしてこの成功こそは、未だその萌芽段階に留まっていたオスマン国家のヨーロッパ方面への拡大を阻止し得る、一手となるはずのものだった。だが歴史の流れは、それとは異なる方向に進んでしまったのである。

ガリポリの奪取の後サヴォア伯アメデーオ6世はブルガリアへの軍事的介入を計画した。そこ

はブルガリアの皇帝を撃破した後、オスマン国家が次第に浸食を進めつつあった地域であった。同様にコンスタンティノープルがオスマンの攻撃に晒されていたことから緑の伯爵(アメデーオ4世)は、東方正教会と西方カトリック教会の合同を促進すべく、ブルガリア人たちとビザンツ皇帝の両者に支援をもたらすことを計画した。このようにすることによりサヴォア伯は、ビザンツ皇帝ヨハネス5世パレオロゴスはそのヨーロッパへの旅を通じて実現しようとした政策を、現実化することを試みたのである。外部からの支援を得ることに窮したビザンツ皇帝ヨハネス5世パレオロゴスは西方へと船出し、個人としての資格ではあったがカトリック教義への改宗を受け入れたが、それはヨーロッパからの軍事的支援を期待してであった。ローマのサン・ピエトロ大聖堂でビザンツ皇帝のカトリックの信仰告白式を行う必要から、教皇ウルバヌス5世もアヴィニョンからローマへの出向を必要とした。後知恵から見ればこの出来事こそが、後期十字軍の管理運営と明瞭密接に関わる世界史的事件たる、教皇の「アヴィニョン捕囚」の終了を告げる出来事となった。

このような理由から、サヴォア伯アメデーオ6世により現在ルーマニアとして知られる地域—そこはヨーロッパの玄関とも呼べる地域である—に行われた軍事的介入は、東西キリスト教世界の双方の精神的頭首としての教皇権の普遍的認知に対する、意義深い貢献と解釈され得る。そしてまた既に確認したようにこのことこそが、カトリック教会にとっての神話でありかつまた制度でもあった、幾度もの十字軍の第一目的に他ならなかったのである。こうした目的は集合的想像力の領域に属するものであるが、なにがしかの仕方において派兵の現実的帰結を無視して追求され得るものでもあった。

サヴォア伯アメデーオ6世の冒険的十字軍の事例こそ、そのような十字軍の典型例であった。ルーマニアをトルコのくびきから解放することを狙いに、彼により企画された広範な作戦を達成する可能性を、彼はほとんど有してはいなかった。それどころかバルカン半島の政治的情勢は、1371年に生じたマリツァ河畔でのそのセルビアに対する予期せぬ勝利以降加速されたトルコ勢力の恐るべき北進により、彼の眼前で根本から転倒されてしまった。その結果として東方正教会に属する主要な地域のいくつか(ブルガリア、マケドニア、アルバニア、セルビアそしてついにはギリシアまでも)は、自分たちがオスマンの脅威に直接さらされるようになったことを自覚せねばならなくなった。これらの地域はこれ以降、勃興する新月旗を掲げる帝国(オスマン帝国)の圧倒的軍勢力を前に、一つまた一つと屈服を余儀なくされて行く。

ヨーロッパにとりオスマンの進出に対抗する最良の策とは、各国の軍勢を統合し、バルカンの正教徒たちを救援するための全面的作戦を展開することであったように思われる。だがこのような行動は、いくつかの理由により不可能だったことだろう。その理由の筆頭として挙げられるのが、当時継続していた英仏間の対立関係(百年戦争)に他ならない。だがいま一つの隠された理由が存在する。この講演の締めくくりには私はこれにつき一言言及しておきたい。私がそれを強調するのはこの側面こそが、この時期におけるイタリア人の典型的な思考様式—だがそれはイタリアのみの側面ではなく、ヨーロッパの大半において共有された思考様式でもあったのだが—を示す

ものだからである。

私が言うこの思考様式とは、オスマン朝の支配者たちを潜在的友人と目するような立場である。それは道徳的含意を—もっと正確に言えば不道徳な含意を—一度外視するイタリアの支配者たちにより、如実に示される処のものである。こうした傾向は信仰に対する侵犯として教会筋から糾弾された。興味深いことだがこの類の同盟化関係の糾弾は、イスラム側の宗教的権威によっても同様に為されたものであった。こうしたキリスト教側イスラム教側を問わぬこぞつての糾弾が、オスマン朝のスルタンにヨーロッパの君主たちとの友好関係の樹立を、断念させるようなことはなかった。こうした君主たちはトルコの絶大な勢力に乗っかって、それが同信者であろうとなかろうとお構いなく、自身の敵対者の足を引っ張ることができれば、それで満足していたのだ。初代のミラノ公となったかの偉大なジャンガレアッツォ・ヴィスコンティこそが、こうしたヨーロッパ君主の最も初期の事例にして、かつまた最も鋭敏で冷笑的な存在であった。彼の遠大な志はオスマン朝の新月旗の進軍がもたらす彼自身に対する利点を、素早く読み取っていた。オスマン朝というこの軍事的巨人の成長は、ヴェネツィアとナポリを同時に苦境に立たせることになったのである。この二つの国こそが、ミラノの最大の邪魔者であった。潜在的同盟者としてのオスマン朝スルタンに対する親近感は、ジャンガレアッツォから彼の息子フィリッポ・マリア・ヴィスコンティへと受け継がれた。彼は秘密外交を展開して、15世紀の前半にエディルネのオスマン宮廷と、非公式の友好関係を確立した。同じ世紀の末にはフィリッポ・マリア・ヴィスコンティの孫にあたるルドヴィコ・スフォネツァ通称イル・モーロが、スルタンの娘の内から花嫁を頂戴し、共同軍事作戦を展開することを提案するまでに至っていた。

ミラノ公国とオスマン朝の両者に共通する敵がヴェネツィアであった。ヴェネツィアの海上勢力は、15世紀から16世紀にかけ生じたオスマン朝の海上への発展により、激しく圧迫されるようになっていた。そのことはミラノの公爵その他のヴェネツィアの敵対者たちにとり、快哉を叫びたくなるような出来事だった。だがこうした一連の事実がヴェネツィアをしてそれがもしも有効な場合、オスマン朝のスルタンに自身の潜在的な友人や庇護者を見出すことを、断念させるものとはならなかった。イタリア外交に特有の二枚舌は、ヴェネツィアによっても実行された。それはとりわけイタリアにおけるスペインの覇権との釣り合いをとるべく彼らによって採用された政策であった。こうしたいかなる宗教的呵責を以てしても妨げられることのない実践的行為がヴェネツィア人たちに対し、「スルタンの尻軽女」というルネサンス期のイタリア中に流通した彼等の共和国のイメージに相応しい、悪しき評判をもたらしてしまった、

昨今歴史家達は政治的实践と宗教的無関心の混交物として、「親トルコ主義」なる言葉を案出した。この「親トルコ主義」という観念は、幾人かのヨーロッパの支配者がオスマン朝と積極的に協力し合うことを企図するよう導いたのである。「親トルコ主義」という現象を理解するために不可能ないま一つのやり方とは、当時の国際関係システムの概念に焦点を当てることに他ならない。それはそれらがどの宗教に属しているかを問わず、地中海の戦争の劇場で互いに絡み合う、敵対者と同盟者の全体を含んだシステムだった。

なかんづくこうしたアプローチが有効なのは、16世紀の中盤の数十年にわたり、オスマンの偉大なスルタンたるスレイマン大帝と、フランソワ1世とアンリ2世というヴァロア朝の二人のフランス王の間に作り上げられた同盟関係の理解に関してであった。それは、その一体性を維持されるべき政治的共同体としてのキリスト教世界に対する犯罪と喧伝された、きわめてどぎつい事例であった。そして神の榮譽に対するこのような侵犯を最も手厳しく断罪したのが、フランス王権に対する最も攻撃的な敵対者たる二人の人物—神聖ローマ皇帝カール5世とイングランド国王ヘンリー8世であったことは論を俟たない。

たとえそれが唯一の要因ではなかったにせよ政治的実践主義、あるいはそう言ってよければ「親トルコ主義」は、中世末期とルネサンス期の間に展開された十字軍運動の弱体化に、大きく貢献するものであったことは疑う余地がない。だがこれは初期近世の間に大きく進展することとなる長期的な過程であるから、ここでそれを取り扱うことを筆者は手控えたい。むしろ本稿を閉じるにあたり更に私が取り上げたいのは、聖戦というものがカトリック的ヨーロッパにとり、ある神話として維持され続けたということ、そしてまたそれが教皇権とり国際問題に取り組むための、なかんづく地中海地域やロシアを含むヨーロッパの東部辺境地域にかかわる国際問題に取り組むための、一つ的手段と目されていたということに他ならない。興味深いことにローマ聖座から発せられる十字軍の号令への参加を拒むということは、不服従の行為と解釈された。かかる不服従は、カトリックの教会法によって「(キリストにより教皇にゆだねられた) 聖なる鍵の軽視」として告発される処の、罪深い振舞いにより生じるものであった。この鍵こそが即ち聖俗両権にわたる教皇の権威の象徴となるものに他ならない。

ここでこれまでの議論に締めくくりを付け、私の論点を総括しよう。キリスト教世界側の敗北に終わった中近東におけるキリスト教—イスラム教間の抗争の終結後数十年とたため内に、十字軍運動の新たな季節が到来した。その実現可能性に拘泥することなくアヴィニョン教皇たちは、ローマ・カトリック教会の一つの神話として、そしてまた一つの制度として十字軍の宣言を再度導入した。何年にもわたって教皇たちは、その度毎の失敗に懲りることなくこうした宣言を何度も繰り返した。たとえもしキリスト教君主側からの反応が期待外れのものであったとしても、聖座の側の目的とする処はローマ教会に対して、カトリック的ヨーロッパの統一の象徴たる十字軍の並外れた推進者としての照明を当てる点にあった。

こうした十字軍の時代の復活の焦点は、もはや聖地の支配権ではなかった。いまや問題とされたのは、ヨーロッパ東部辺境地域の防衛だった。全体としてこの長期の抗争は様々の仕方でごまかされている。学術的歴史家はかかかかる運動の目的が、もはや聖地の支配権で代表されるものではないことを含意しつつ、「後期十字軍」という概括的範疇を使う傾向が強い。「後期十字軍」という言葉は時に「キリスト教勢力対オスマン朝間戦争」の同義語とも解されている。とは言え、直接にオスマン朝に向けられた訳ではない幾つかの派兵案件もまた、にもかかわらず「後期十字軍」の範疇に分類できるという事実には留意すべきではあろう。ここで想起すべきはドイツ、なかんづくオーストリアを含む南ドイツではこうした抗争は、「対トルコ戦争」として知られてい

るということである。この戦争はこの地域のカトリック的一体性の形成にとり、根本的な役割を果たしている。またこのことは同時に、異教徒に対するキリスト教ヨーロッパの先導者としての、ハプスブルク皇帝の神話を称揚するものでもあった。

西方の教会大分裂(1378-1417)の危機の間に生じた停滞の後、十字軍政策はルネサンス期の教皇権により再興され、15世紀から16世紀にかけ間断なく展開していった。我々の観点からすれば「初期の」十字軍—即ちエジプト人と戦うことからなる聖地十字軍のことである—と「後期の」十字軍—即ちトルコに対抗するヨーロッパ十字軍—の間に横たわる法制的・制度的継続性の強調が肝要となる。後期十字軍は初期のそれと比較し、数の面でずっと頻繁に発動されたことを指摘し、本稿を締めくくりたい。ただし派兵が宣言されたものの、実際には決して実行されなかった事例が多数存在しているため、後期十字軍の全体像を確定することは困難である。後期十字軍が数の上でどれだけ頻繁であったか見当をつけるため、1571年のレパントの海戦におけるキリスト教徒の勝利に着目すべきであろう。それはオスマン帝国の海上における勢力拡大を阻止した点で、16世紀の地中海史上最も名高い出来事であった。歴史家たちはレパントの海戦を以て、トルコ人たちがヨーロッパの東の端に出現して以降、教皇権が宣言した第13回目の対トルコ戦役の成功の事例だと称している。それ以後も他の戦役が発動されてはいた。だが既に指摘したように「後期十字軍」を構成する派兵の正確な数は、依然その同定が困難な作業に止まっているのである。